

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00939

研究課題名(和文)東西文献からみたモンゴル、ポスト・モンゴル時代の軍事と外交

研究課題名(英文) Military and Diplomacy in the Mongol and Post-Mongol Period as Seen from East and West materials

研究代表者

宮 紀子 (MIYA, Noriko)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60335239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：14世紀にペルシア語で書かれたモンゴル帝国の歴史書の軍事・外交に関わる重要記事を翻訳し、同時代の漢籍、ヨーロッパ諸語資料、画像資料を用いて注釈を附した。その作業過程で、13世紀半ばに大都(いまの北京)の天文台勤務の劉沢が、アラビア天文学に刺激を受けて未知数三つの高次方程式の問題集を出版したこと、モンゴルがスカンジナビア半島や黒海の形状、ヨーロッパ各国の政治情勢や風俗を正確に把握していたこと、クビライ・カアンの『聖訓』がティムール朝の王子たちの教材の一つであったこと、などいくつかの注目すべき事実が判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国山西省に建っていた碑石から、未知数三つの高次方程式を扱った『乾坤括囊』の著者名、経歴、編纂時期が判明した。クビライ・カアンが作成させた「世界地図」の亜流たる「混一疆理歴代国都之図」「大明混一図」の西半分の地名を、ペルシア語の『集史』や地理書によって解読・分析することで、当時の軍事・商業の重要拠点がより明確に浮かび上がってきた。モンゴルは外交・諜報活動により、1300年頃までにヨーロッパの海図を入手しており、昨今注目されている黒海、クリミア半島のほかスカンジナビア半島の形状も正確に把握していた。これらの事実によって、歴史文献学から数学史・地理学へ提言が可能となり、新たな一頁を書き加えられる。

研究成果の概要(英文)： I extracted and translated important military and diplomatic articles from the history of the Mongolian Empire written in Farsi in the 14 century. The translation was annotated with materials of Chinese classics, European languages and images of the same period. In the course of this work, some remarkable facts have come to light. Of particular importance are the following.

Firstly In the middle of the 13th century, inspired by Arabic astronomy, Liu Ze, who was working at the observatory in Daidu (now Beijing), published a collection of problems on multivariate polynomial. Secondly, the Mongol Empire had an accurate grasp of the shape of the Scandinavian Peninsula and the Black Sea, as well as the political situation and customs of European countries. Thirdly, the Timurid princes learned Kublai Ka'an's "precepts" as an imperial learning material.

研究分野：モンゴル時代史

キーワード：モンゴル時代 ポスト・モンゴル 地理学 世界地図 明代 軍事 外交 数学史

1. 研究開始当初の背景

「モンゴル時代史研究」は、これまで二つの大きな潮流のもとに進められてきた。

17世紀以降、第二次世界大戦終了にいたるまで、ヨーロッパ列強が競って東方拡大、植民地政策を展開した結果、当該各国の学者たちは、フレグ・ウルス(=イル・カン国)とその後継王朝、周辺国において編纂されたペルシア語、アラビア語の歴史書を同時代のヨーロッパ諸語の原典資料と照合・分析することによって、主に中東以西の世界を描かんとした。

いっぽう、清朝(=ダイチン・マンジュ・グルン)以降の考証学者、あるいはその伝統を汲む日本、台湾、韓国、内蒙古等の歴史研究者たちは、漢籍を中心に、匈奴以来の歴代遊牧国家の変遷も参考にしながら、ときにモンゴル語、ティベット語、日本語資料等を併用して大元大モンゴル国(=大元ウルス)とその周辺を眺めてきた。

しかし、両者の境界にあたるユーラシア中央域に関しては、チャガタイ・ウルスやカイドウの王国における「正史」といえるものが存在しない。いっぽうで、オーレル・スタイン、ポール・ペリオ等の探検によって得られたウイグル語、モンゴル語、西夏語等の出土文書、多言語合璧の碑刻等があり、東西の学者が熱心に整理・解読してきたが、なにぶん少量で断片が多く、内容にも偏りがある。所詮は“落穂拾い”であり、東西の文献が語る事柄の傍証・確認のためには利用できても、この地域の歴史像を再構築するには到底足りない。

アフロ・ユーラシア全域を俯瞰しながら、13-15世紀のモンゴル、ポスト・モンゴルの興亡を正確に把握し、かつユーラシア中央域の歴史をも描出しようとするなら、まずは東西の二大資料群(典籍、文書、石刻、地図・ミニアチュール等の図像資料、多言語辞書・対訳資料、考古資料、美術工芸品などあらゆる形態)を可能な限り収集し、典籍については最古・最良のテキストを見極め、個人の脳内で、両資料群を交叉させ、それらの記述を多角的かつ緻密に検証する能力が必要とされる。それぞれの地域の専門家による共同研究でも、ある程度の成果は得られるだろうが、じっさいには対象への認識や用語の使用、史観等にズレ、個人差が生じている可能性があり、一貫した叙述は難しい。この手法が「王道」であることは、おそらく先学たちも認識していたはずだが、とうじは環境が整っていなかった。

2. 研究の目的

「モンゴル時代史」研究において、もはや必須の文献となっているペルシア語資料のアター・マリク・ジュヴァイニーの『世界を開くものの歴史』、ラシードウッディーンの『集史』は、1990年代までに、中国の学者が、英語やロシア語の訳註から翻訳し、十全ではないものの関連の漢文資料等も補足したこともあり、漢文資料のみを扱う研究者であれ大凡の内容は把握できるようになっている。現在は、世界各地に蔵される諸写本の調査も進み、記述の異同、その裏に潜む意味についても留意されるレベルになってきた。

しかし、『オルジェイトウ史』、『ヴァッサーフ史』(の一部)については、かつてドイツ語で訳註が作成されたものの、不十分なものといわざるをえない。前者の写本は、実質一点しか存在が知られていない。後者は、膨大にある諸写本の調査・整理、それらに基づく校訂作業が全く進んでおらず、しかも難解このうえない華美な文体で書かれているためイランの学者、イスラーム関係、ペルシア語・アラビア語文献を専門とする学者にとっても内容の理解は困難とされる。両者ともアラビア文字によるテュルク・モンゴル語、漢語の音訳の箇所について正確に解読されておらず、ユーラシア中央域や大元ウルスの軍事展開・外交に関する重要な記述が散見されるにもかかわらず、膨大に存在する漢文資料との照合・分析がまったくといっていい

ほどなされていない。注釈も、清朝乾嘉年間の考証学者のレベルの緻密さにはほど遠い。したがって、改めてそれらの内容を広く紹介し、検討しなおす必要がある。

したがって、二十数年間、中国の改革開放に伴って膨大な数量を以て出現した漢文資料に目を通し、同時に日本、台湾、韓国等に所蔵される学界未知の漢籍・文書・図像資料等を徹底調査、モンゴル時代に関わる記述を博捜・抽出し、訳註作成に臨む。また、国内外の漢文資料を扱えるモンゴル時代史研究者は、これらのペルシア語史書はもとより、『ヘラート史記』、『シャイフ・ウヴァイス史』、『集史続編』、ハーフィズ・アブルーをはじめとするティムール朝の歴史書・地理書、同時代の類書(百科事典) 詩文集等については全くといっていいほど利用していない。そこに記されるユーラシア中央域、大元ウルスから明王朝にいたる中国関連のデータの抽出・解析作業、相互に補完しあう東西文献の綿密な比較統合作業は、歴史・語学・文学・哲学・美術など中国学全般の今後の展開にも資する所がある筈で、新たなモンゴル帝国史、ポスト・モンゴル史の構築、北のモンゴルと西のモンゴルに挟まれながら国家を営せねばならなかった明代の軍事と外交の歴史 『実録』、档案があるにもかかわらず、昨今、地域社会の経済や文化の分析、素描に偏りがちとなっている の見直しの確実な一歩ともなるう。

3. 研究の方法

(1) 資料収集

13 - 15 世紀に漢語・日本語・ペルシア語・アラビア語・テュルク語・モンゴル語・ヨーロッパ諸言語で書かれた最古最良の典籍・文書現物・地図・ミニアチュール等の図像資料・多言語辞書・対訳資料などの閲覧調査・写真撮影・複写申請を行った。機関によってはホームページ上で、各種貴重資料の全画像を公開しているので、小まめにチェック、把握した。

漢文資料については、元・明刊本を中心に、それを覆刻・重刊した朝鮮版、五山版、抄本なども含めて、未公刊の各種資料を収集した。人文科学研究所に蔵される膨大な中国歴代の地方志、拓本をはじめとする石刻資料、考古発掘報告、朝鮮王朝実録や文集などの朝鮮資料から、モンゴル時代、ポスト・モンゴル時代の軍事・外交に関わる記事を抽出・整理した。

ペルシア語、テュルク語等の資料については、13 世紀 - 15 世紀の古写本を中心に、できるだけ最古最良のテキストを選びながら、歴史書はもとより、医学・薬学・数学・工学・農学など科学技術に関する資料、中国、ユーラシア中央域との交流を直截に示す実物資料、ならびに当時の世界認識や交通ルートを示す地図のほか、中国絵画の影響が強い細密画、モンゴル朝廷、ティムール朝の諸制度・文物を描く細密画の入ったテキストを収集した。

フレグ・ウルス、ジョチ・ウルス(=キプチャク・カン国)およびその後継王朝と通商・外交使節団の交流があったヨーロッパ諸国、マムルーク朝等の根本資料、研究文献、イランやトルコ、ロシアの発掘報告や美術書、博物館の所蔵品図録の収集も行った。フランス、イギリス、ドイツ、ロシア、イタリアには、国力を投入してなされた外交・通商文書、地図・言語資料にかかわる分厚い調査・研究の蓄積がある。インターネット上で無料ダウンロードできるものも増えており、これらの把握と収集に努めた。

(2) 漢籍・ペルシア語・ヨーロッパ諸語資料中の外来語の分析

かつての基盤研究(C)「モンゴル時代を中心とする東西資料の外来語分析」の研究で取った手法 ペルシア語、アラビア語、ヨーロッパ諸語資料中のテュルク・モンゴル語、漢語、契丹語等、漢籍中のペルシア語、アラビア語、テュルク・モンゴル語を抽出・整理し、相互に徹底的な比較・照合・分析作業を行い、モンゴル時代の政治・軍制・外交・文化のシステムと実態をひとつひとつ明らかにしてゆく は、『元史』の「本紀」や「志」の再編纂の作業にきわ

めて有効であること、実証されたので、15世紀半ばまで時代を繰り下げて継続した。

(3) 訳注

『オルジェイトゥ史』、『ヴァッサーフ史』、『集史続編』、ハーフィズ・アブルーの歴史書・地理書、『ラシード史』のペルシア語資料等から、諸ウルス、モンゴルの後継勢力、明王朝等の外交使節団や戦闘、軍事展開、当地の伝聞・情報等の重要記事を抽出、同時代の多言語文献、画像・考古資料等も用いて緻密な訳注の作成を行った。

4. 研究成果

訳注作業を中心に据えて実施しつつ、資料収集の過程で発見されたさまざまな重要記事・判明した新事実を、学術論文と商業雑誌の二本立てで、迅速に文字化・公開することにつとめた

まず、モンゴル、ポスト・モンゴルに関わる研究の歴史を振り返り、有益な研究書・工具書のリストを整理し、公刊した。

次に、『オルジェイトゥ史』が記録するモンゴル諸王の系譜を、ほかの資料と比較分析することで、大きく2系統に分類されているラシードウッディーンの『集史』第一部『ガザンの吉祥なる歴史』の諸写本の前後関係を整理し、その記事の修正が、大元ウルスを宗主とする各ウルス ジョチ・ウルス、フレグ・ウルス、チャガタイ・ウルスのあいだの外交使節の往来、情報交換によって行われたことを確認した。同様の作業は今も公刊にむけて継続中である。

クビライ・カアの時代に行われた東南アジア遠征を、従軍した一兵卒の現場からみた証言 中国山西省に建っていた碑(佚)の移録から辿り、南宋遠征の水軍が、第三回の日本遠征派遣から急遽、チャンパ、ジャワ遠征に転用されたこと、軍功に対してどのような褒賞がなされていたか、などを紹介した。

クビライは、東南アジア諸国に調教された象の献上を求めた。巻狩りや冬の都の大都(現在の北京)から夏の首都の上都(現在の内蒙古)への移動の際には「象輿」をもち、ナヤンの乱の際にはそれに坐して出陣した。フレグ・ウルスやムガル朝の細密画、タイなどの観光地の「象輿」から、象の背に設えられた箱型のもと考えられていたが、痛風もちで老齢のクビライが利用したのは、大明時代の皇帝の御幸を描いた「出警図」「入蹕図」絵巻から、前に三頭、後ろに一頭を六本の縄で連結する四頭だての幌車だったこと、クビライの孫のテムルやフレグ・ウルスのガザン・カンが移動に使った象輿もおそらく同様であったことを明らかにした。

また、劉貫道「世祖出獵図」に描かれる面々を、大明時代の『集古図像』やマルコ・ポーロの『百万の書』(『世界の記述』)、『至正析津志』、耶律希亮(耶律楚材の孫)の碑刻、『オルジェイトゥ史』等から分析し、人物を比定した。このメンバーたちが、ナヤンや中央アジアのカイドゥの叛乱の鎮圧に活躍し、次期カアの決定にも大きな発言力をもったのである。

なお、クビライのもとには、象や犀のみならずアフリカのシマウマ、ライオン、チーターなどの珍獣が贈られ、大都の動物園で飼育されていた。象と犀は死ぬとその皮革を甲冑の製造にあてていた。キリンは、フレグ・ウルスやジョチ・ウルスに外交上の贈答品として送られていたが、王暉の記録によれば、クビライも1290年に実見していた可能性がある。

逆に大元ウルスからは、ユーラシアの縦横に張り巡らされたジャムチ(駅伝)網を利用して、ウイグル字・パクパ字モンゴル語、漢語の『大元通制』(法令書)や道釈画の「水月観音図」、「三隠図」(豊干禅師・寒山・拾得)、「四睡図」等がフレグ・ウルス朝廷に送られたが、これらはほぼ同時期の高麗や日本でも読まれ、鑑賞されていた。『大元通制』についてはその書名が『ヴァッサーフ史』にも記録されている。パクパ字モンゴル語で出版されたクビライの『聖訓』は、ポスト・モンゴルのひとつティムール朝でも帝王学の教材として利用され、ティムールの孫ピ

ールムハンマド王子が座右の銘として親写した一葉が『驚異の雑纂』に収録されている。

チンギス・カンの時代、ウイグル王国の旧臣カライガチュベイルク、ヨルダシュイナク父子、ヨグリムテムル、チンカイ、ナイマン王国の旧臣タルトンガ等は、それぞれチンギス・カンの息子のトルイ家、オゴデイ家、チンギス・カンの末弟オッチギン家の師傅となり、モンゴル語の書写にウイグル字を導入し、教育や行政に大いに貢献した。初期のウイグル字モンゴル語の現物として、1246年にオゴデイの息子のグユクが教皇インノケンチウス四世に宛てた国書の印璽が知られていたが、それよりも早い1237年に文書の添え書きとして書かれたものを、全真教（道教の一派）教団の碑石に見出し、紹介した。

チンギス・カン・カンの征西に占師・書記として扈從した耶律楚材は、サマルカンドでアラビア天文学の優位性を痛感し、セルジューク朝で使用されていた太陽暦、アブー・アルファトフ・アブドゥッラフマーン・マンスール・アル・ハーズィニーの『ムタバル暦』（通称『サンジャル暦』）を、周囲の協力のもと漢語に訳し、1236年に刊行した。旧金朝の天文台の技官や元好問、李治といった学者たちはこれを理解するために、プトレマイオス天文学やユークリッド幾何学、代数学などの著述に触れ、ホラーサーンからきた学者・技術者たちとも交流した。未知数を一つ設定した高次方程式の著述が1240～50年頃に複数出現し、まもなく未知数を三つ設定した高次方程式の解説書・問題集『乾坤括囊』が編まれた。この著者は不詳とされていたが、山西省の地方志に記録されていた碑刻（佚）の要約から、劉沢（字は潤父）しかも耶律楚材の推薦によって、現在の北京にあった天文台に勤務し、1260年頃には長官となっていたことが判明した。『授時暦』を編纂した王約、郭守敬、中国数学史に燦然と名を残す朱世傑等は、おそらく天文台でこの『乾坤括囊』を学んでいた。以前、対馬宗家旧蔵の『事林広記』の「数学類」や抄物の関連記事を紹介した結果、日本の和算史のほとんど空白といってよかった「中世」の項を多少埋めることとなったが、これは世界の数学史に新たな一頁を加えるものといってよいだろう。

この天文台はやがて科学技術庁に相当する機関の管轄下にはいり、天体観測・暦の製作のほか軍事用の精密な地図の製作にも関与した。クビライの信任を受けていたプハラ出身のジャマールウッディーンが長官をつとめ、旧金朝、旧南宋の官僚たちの「華夷思想」を打破する目的で、アラビア地図と中国地図を合体した「天下地理総図」が製作された。「混一疆理歴代国都之図」「大明混一図」はその亜流の世界地図だが、西半分の地名をペルシア語の歴史書、地理書によって分析しはじめた結果、とうじの軍事・通商の重要拠点が明確に浮かび上がってきた。1285年以前に、それなりの海図（ポルトラーノ）を入手しており、黒海、地中海、カスピ海の形状をかなり正確にとらえていたことも明らかになった。そして、ラッバン・パール・サウマのヨーロッパ訪問以降は、スカンジナビア半島やアイルランドの知識も加わったのである。後のカアンによって「天下地理総図」が作り直されていたら、もっとすばらしい地図が伝来したことだろう。地名の解読作業はこんごも継続し、一覧表は速やかに公開する予定である。

その他、モンゴル時代のさまざまなタイプの「偽書」を紹介したり、大学の教材の執筆にも参加した（中西竜也・増田知之編『よくわかる中国史』ミネルヴァ書房2022年9月予定）。

なお、本研究の口頭での成果発表の場として、以下が予定されている。

・「絵図で読み解くモンゴル時代の東西交流」京都国立博物館 夏期講座 2022年8月5日

・「大元ウルスの『知』の遺産」東方学会 京都紫蘭会館 基調講演 2022年11月5日

・「大モンゴル国からみたヨーロッパ」（仮題）東北大学西洋史研究会 シンポジウム 2022年11月20日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 256
2. 論文標題 「知」の混一と出版事業	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学（元朝の歴史 モンゴル帝国期の東ユーラシア）	6. 最初と最後の頁 151-162 + 1 p1.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 124
2. 論文標題 クビライのマスク	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 125
2. 論文標題 権威もつはんこ（上）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 126
2. 論文標題 権威もつはんこ（下）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 127
2. 論文標題 ユーラシアの東西で読まれた法令書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 128
2. 論文標題 モンゴルの文字の来し方・行く末	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 129
2. 論文標題 モンゴルの文字の来し方・行く末	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 130
2. 論文標題 ユーラシアの東西で読まれた医学書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 131
2. 論文標題 ユーラシアの東西で鑑賞された道釈画	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 132
2. 論文標題 パヤンの肖像	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 133
2. 論文標題 一兵卒が語る東南アジア遠征	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 134
2. 論文標題 象の輿に乗って	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 135
2. 論文標題 キリンが来る！	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 136
2. 論文標題 新異なるアフリカ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 137
2. 論文標題 描かれたヨーロッパ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 30
2. 論文標題 天地を擲ち算袋の裡に封ずべしー中国数学史におけるepoch	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国史学	6. 最初と最後の頁 147-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 767
2. 論文標題 帝国の遺文、異聞の帝国	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 203-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 94
2. 論文標題 『オルジェイトゥ史』が語るアジキ大王の系譜 外交使節の往来と歴史書の編纂(1)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方学報	6. 最初と最後の頁 460-437
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 80-1
2. 論文標題 諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』に対する疑義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 131-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 138
2. 論文標題 ヨーロッパの権力者たち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 究	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮紀子	4. 巻 なし
2. 論文標題 「大元大モンゴル国の中国統一」「アフロ・ユーラシアをめぐる人・物・知」、「モンゴル朝廷と漢字文化」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中西竜也・増田知之編『よくわかる中国史』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 108-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 宮紀子 (呼斯樂訳)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 社会科学文献出版社	5. 総ページ数 不明
3. 書名 元代的出版文化	

1. 著者名 Noriko MIYA	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Thames & Hudson	5. 総ページ数 480p (pp34-35)
3. 書名 Susan Whitfield(ed), Silk Roads: Peoples, Cultures, Landscapes (The Amalgamated Map of the Great Ming Empire ())	

1. 著者名 宮紀子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 896p (pp.819 - 887)
3. 書名 志茂碩敏・智子『モンゴル帝国史研究 完篇 中央ユーラシア遊牧諸政権の国家構造』(モンゴル帝国史研究に進む人のために)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------